

第一章

問題提起——対立する両陣営の反目が強く、決着はつきにくい——人間と社会の完全化に反対する主たる論拠には、いまだ正当に答えられていない——人口がもたらす困難の性質——本論の主要な論証の骨子

近年、自然科学では思いがけない発見が相次いでいる。印刷術の発達により知識の普及が進み、学識者に限らず、識字に乏しい人びとにまで届くようになり、自由で熱のこもった探究が広がった。政治にも前例のない注目が集まり、人びとに強い衝撃を与えている。とりわけフランス革命は政治における巨大な出来事であり、人びとを鼓舞するの
か、それとも破滅へ導くのか、その行方はいまだ定まらない。こうした動きが重なり、多くの優れた人びとは、私たちが人類の未来の帰趨を左右しかねない極めて重要な変化の時期に差しかかっていると受け止めている。

今、最も重要な論点は次の問いに尽きる。人類はこれから、かつて想像もしなかった

速度で前進し、果てしない進歩へ向かうのか。それとも、幸福と不幸のあいだで揺れ続け、どれほど努力しても望む到達点からはなお途方もなく遠いままなのか。

こうした問いを前に、人類の幸福と将来の利益を願う人びとや読者は、この不確実な膠着状態の終わりを案じ、行く末を見通す小さな手がかりや一条の光となる知見を切に求めている。それでも、この最重要の課題をめぐる当事者や論者はなお歩み寄れず、隔たりは埋まっていない。各陣営の主張や論拠は、公正で開かれた議論の場でいまだ正面から検討されておらず、論点は整理も収束も進まず、理論面でも結論や決着への道筋はほとんど見えない。

現行の秩序を擁護する人びとは、思弁的な哲学者について、博愛を掲げて理想の社会像を語るのは、現行制度を打ち壊して自らの周到に練られた野心を遂げるためだと決めつけ、狡猾で不正直な集団とみなす傾向がある。あるいは、健全な理性の持ち主が耳を貸すに値しない愚かな空論や荒唐な逆説を振り回す、向こう見ずな熱狂家とみなす。

人間や社会は完全になりうる、あるいは無限に改良できると信じて主張する側は、既存の制度や秩序を守る側に対して、さらに強い軽蔑と反発を示す。彼らは相手を、惨めで狭量な偏見に縛られた奴隷、または市民社会の欠陥や弊害から利を得るがゆえにそれ

を弁護する者だとみなす。さらに、私利私益のために判断力を売り渡した人物か、偉大で高潔なものを理解する知性を欠き、目の前の五ヤードすら見通せないため、啓蒙的な人類の恩人を自任する者が描く構想や展望を理解できない者だと断じる。

不和と陰悪な応酬が続けば、真理の探究も共通の利益もむしろ損なわれる。双方にある優れた論点や有力な根拠でさえ、正当に重みづけされず、適切に評価されない。当事者は自説の貫徹に固執し、相手の指摘や論点に耳を傾けて自己の見直し・是正・改善を図る姿勢を欠く。

現行の社会秩序を支持・擁護する人々は、政治に関する思索や理論をひとまとめに退け、社会が完全になり得るという主張の根拠を検証しようとしめない。まして、その誤りを公正かつ率直に明らかにしようとする進んで労をとることはない。

思弁に傾く哲学者も、観念先行の哲学者も、机上の思索に終始する哲学者も、いずれも真理の大義を損なう。彼らは、よりよい社会の実現に心を奪われ、その恩恵を魅力的に語る一方で、現行制度を端から糾弾することに没頭し、弊害を除く最善かつ安全な手立てを考えようとせず、人間が完全へ近づく歩みを理論上でさえ阻みうる巨大な障害の存在にも目を向けない。

学問の世界では、正しい理論は実験によって常に確証され、妥当な理論は必ず裏づけられ、正当な理論はその正しさが確かめられるという見方が広く受け入れられている。

しかし、実地では大小さまざまな摩擦や細かな事情が折り重なり、広い視野と鋭い洞察を備えた者でさえ事前に見通すことはほとんど不可能である。このため、異論や反対論を丁寧検討し、明瞭で一貫したかたちで反駁・反証を尽くして退けないかぎり、どのような主題でも理論を確定的に正当化できる場面は多くない。

私は、人間や社会の完全を目指す論考に触れるたび、そこに描かれた魅力的な光景や構想に心温まり、励まされ、大きな喜びを覚えてきた。しかし、そこへ至るまでには、私の理解では到底乗り越えがたい重大な困難が横たわっていることも指摘せざるをえない。本稿の目的は、そうした障害を挙げて検討することであり、改革や革新の支持者に対する反駁の材料を用意することではない。むしろ、それらの障害が一切取り除かれるなら、これほどうれしいことはないと言言しておきたい。

これから述べる、私が最も重視する論証は決して目新しいものではない。その基本原理の一部はヒュームが示し、アダム・スミス博士がさらに掘り下げている。ウォレス氏もこの論題に適用しているが、十分な重みや最も説得的な観点から示したとは言いがた

い。私の目に触れていない多くの著者や著述家が同趣旨を述べている可能性もある。したがって、もしこの論証がすでに公正かつ十分に解明され、満足のいくかたちで答えが与えられていたなら、私が改めて取り上げることはなかっただろう。ここでは、従来とはやや異なる角度から示したい。

私は、人間の完全化を説く人々がなぜこの点を等閑にしてきたのか、うまく説明できない。ゴドウィン氏やコンドルセ氏ほどの人物の才能と誠実さを疑うものではないし、私にも、おそらく多くの人にも、この難題は越えがたい壁に見える。それにもかかわらず、彼らはこの問題をほとんど取り上げず、なお熱意と自信を保ったまま議論を進めている。彼らが意図的に反対論や反証から目を背けている、とまでは言わない。むしろ、彼らのような人々が顧みない事柄であれば、どれほど自分にはもっともらしく見えても、自説の妥当性を疑うべきだと考える。同時に、この局面では人は誤りやすいことも認めねばならない。たとえば、誰かの前にワインの杯が幾度も差し出されているのに当人が応じないなら、私はその人が目が見えないのか、非礼なのかと受け取りがちだ。だが、公正を期すなら、私の見間違いで、差し出されたものは私が思っていたような申し出ではなかったのかもしれない、と考えるべきである。

議論の前提として、正当な哲学的根拠や学理に裏づけられず、実現可能性も論証できない憶測や仮説は、当面脇に置く。仮に将来、人間は最終的にダチヨウになると主張する者がいても、直ちに全否定はしない。だが、分別ある読者を合理的に納得させたいなら、首が次第に伸び、唇が硬くさらに突き出し、脚の形が日ごとに変わり、髪が羽軸のような短い剛毛へと変わり始めている、といった過程や事実を示し、かかる異例で驚異的な転化の蓋然性を立証すべきだ。そのレベルの蓋然性が示されないかぎり、そうなた後の幸福や走力・飛翔力、また、ぜいたくが退けられ生活必需品の収集のみに従事する結果として各人の労働が軽くなり余暇が潤沢になる、などといくら説いても、時間と弁舌の空費にすぎない。

私は、公準を二つ置くのが妥当であり、それらを正当に示しうると考える。

第一に、生きるには食料が不可欠であり、人はそれなしには生きられない。

第二に、男女の情愛や性的欲求・性衝動など、人の性に関わる欲求は社会に不可欠であり、そのあり方や程度は、今後もおおむね現状のまま推移するとみられる。

これら二つの法則は、人類の知見と記録の及ぶ限り一貫して確かめられており、人間の本性に刻まれた確かなものだとして示されてきた。これまで変化は観測されていない。宇

宙の秩序を最初に整え、生物の利益のために今も一定の法則に基づいてあらゆる運行を司る存在が直接に力を行使しないかぎり、将来これらが現在の性質やあり方を失い、現状と異なるものになるとみなす根拠はない。

私は、いずれ人間がこの地上で食物なしに生きられるようになると主張する論者を知らない。これに対しゴドウィン氏は、時の経過とともに男女の情熱はやがて消えるかもしれないと推測しているが、本人もあくまで推測にすぎないと認めており、ここでは深入りしない。人間の進歩について最も確かな根拠は、人類が野蠻の段階から大きく前進してきたという事実と、その歩みの行き着く先がなお見定めがたいという点にある。これに反して、男女の情熱が消えていく方向の進展は見られない。今もその力は二千年、四千年前とほとんど変わらない。例外的な個人は昔も今もいるが、その数や割合が増えている兆しはない。ゆえに、例外があることをもって、いずれ例外が規則となり規則が例外に転ずると結論づけるのは、論理的でも科学的でもない。

以上の前提が認められるなら、人口の増加力は、地球が人類を養うために供給できる食料、すなわち地球の食料供給力を、はるかにしかも際限なく上回る、と私は主張する。人口は制約がなければ倍々に増えるが、食料など生存資源の供給の増加には限りがある。

る。初歩的な計算だけでも、前者の伸びが後者を大きく凌ぐことは明らかだ。

人は生きるために食物を要するという自然の法則に照らせば、人口の増加と食料の供給・生産は、常に均衡関係に置かれざるをえない。

すなわち、糧を得る難しさや生活資源の不足が、人口を常に強く抑制する要因として持続的に作用しているということである。しわ寄せは必ずどこかに集中し、人類の相当部分、広い層の多くが、避けがたい深刻な影響や大きな打撃を受ける。

自然は動物界と植物界の隅々にまで生命の種子を惜しみなくまいてきたが、それを育む場所と糧には限りがある。たとえこの地上の一隅に芽生えた生命であっても、食糧と空間が十分なら、数千年もあれば幾百万の世界を埋め尽くすほどに増えうる。だが、自然の隅々に及ぶ厳然たる必然の法則が、あらゆる存在を定められた枠内にとどめる。植物と動物の群れはその抑制のもとで勢いを弱め、人間という種も理性の努力によつては逃れられない。こうして植物や動物には種子の浪費や疾病、早死にが生じ、人間には貧苦と悪徳が生じる。貧苦はこの法則の避けがたい帰結であり、悪徳は生じやすく蔓延しがちだが、絶対に不可避とは言えない。美徳は、悪のあらゆる誘惑に抗しうるかどうかによつて試される。

私は、人口増加の勢いと地球の生産力のあいだには本質的な不均衡があり、そのずれを最終的に均衡へ引き戻そうとする普遍的な自然法則が働いていると考える。これこそが社会の完全な実現を阻む越えがたい壁であり、他の論点や根拠はこれに比べれば副次的である。この法則は生物界全体を支配しており、人間がそこから逃れる余地はない。平等という理念も、いかに徹底した土地の再分配や均等な配分も、この圧力を一世に限りとも緩めたり退けたりすることはできない。したがって、社会のすべての構成員が安楽と幸福と相応の余暇を享受し、自分と家族の生計に不安を抱かずに済む社会は、原理的に成り立たない、という結論に至る。

したがって、前提が正しければ、この議論は決定的な反証となり、人類の大多数が完全になりうるという見方は否定される。

議論の大枠を示したうえで、今後はいっそう具体的かつ詳細に検討と検証を進めたい。知の源泉にして基盤であり、確かな出発点でもある経験が、その正しさ・妥当性・真実性を、例外なく一貫して裏づけることを確かめたい。